

オリックスの試合が札幌ドームであった。飯山裕志選手（以下「飯山裕志」と表記）の思い出に残る素晴らしい引退試合であった。10年前に日本ハムが北海道に来てから飯山裕志の姿を追っていた。これまでの間、出番が必ずしも多かつたとは言い難いが、グランドに向かって走り出す姿や守備につく姿・形に生き様を感じた。練習でできる以上のことが試合でできるはずもないという考え方を持ち、常日頃の練習を試合だと見て取り組んできたとの言葉を聞いて胸に迫るものがあった。

ところで、「ここで飯山裕志の思い出を書き綴ることは我慢して、飯山裕志という1人の仕事人の姿を見て、久しぶりに「仕事」というものに取り組む姿につき、大きな反省を含めて振り返りたいと思う。

若いときに大切なことは、がむしゃらに仕事に打ち込むことであろう。時間を気にせず仕事に打ち込み、自分のあるべき姿を摸索することは大切なことである。真剣に費やした時間が多ければ多いほど、その後の自分の仕事の質に転換していくものと信じていた。量が質に転化していくの

である。しかし現実は、一次関数のように一定のスピードで仕事の成果が出てくるわけもなく、二次関数や三次関数の曲線のように我慢し続けなければならぬ平坦な長い曲線の上を歩んでいるのではないか。しかも、急激な上昇気流の曲線上を歩んでいても、実感としては、従前通りの平坦な曲線の上を歩んでいる感覚でしかなく、あるとき、急に目の前に広がる景色が変わっているのに気がついたというのが若い時分の実感ではなかろうか。そして、その後も、ゆっくりと感傷に浸ることなどできるわけもなく、また、再び、新しい景色を平坦な曲線と感じ続け、突然、今まで見えていなかった景色を目の当たりにしていう意味で、以前、営業時間が終わった後の時間帯に、日本料亭の料理人が店舗の大将から料理の改善策を教えてもらつて、退職時間外労働だと主張してきたのを担当弁護士として垣間見たとき、そのような料理人は大成するはずもないだろうと思つたものである。

ところが、残念なことに、このよう

も、その後、それなりの時間が経過して後ろを振り返ると、若い時分から歩たりとも進めていない、進歩しない感覚に襲われてくる。このような感覚しか持ち合わせず50歳台に入りこれから徐々に還暦を迎えていくのだろうと觀念もしてきた。そういう日常生活を過ごしつつ、日々の練習の時間を試合に臨むような気持ちで過ごし、準備を怠らないこと、ただ自分ができることを精一杯やり続けること、それが必ずしも結果として報われなくとも自分の姿を全うしようとする飯山裕志の姿を見たとき時間軸を超越する何か大切なことにつながっていくような気がした。

人間はやはり謙虚さ・愚直さがとても大切なように思う。大きな上昇気流に乗つていると自覚できていとしても、日々の生活における支柱は、周りの数多くの人々から助けられているという気持ちを持ち続けることであろう。当たり前のことが実はとても当たり前ではないこと、「表」と思われる事が実はよくよく見ると「裏」であつたりするなど、物事の本質はとても不可思議なのだと思う。

にとつて一番大切なことは、「自分の感情をコントロールし続けること」である」と教えていただいたことがある。物事の本質を考えながら自分の感情をコントロールすることはとても難しいとしても重たい言葉だと思う。

何年か前の「ラムにも書いたが、私がまだ25歳のころ、大きな柱時計の振り子を見て、物事の本質がわかつたような気がしていた。振り子は大きく左右に振れているが必ず真ん中を通る。真ん中というものは大きく左右に振れる勇気をもって行動した者だけが特別に許されてどこが真ん中であるのかを知ることができるのだと思つていた。しかし、これも当たり前のことではなく、単なる1つの考え方しか過ぎない。例えて言えば、砂浜を自分でまつすぐに歩んできたと自信をもつて言えたとしても、後ろを振り返り自分の足跡を見つめた時右に左にと大きく右往左往して進んでいる自らの足跡の軌跡があることを愕然としながら発見するという感じであろうか。

ビールを楽しく飲みながら飯山裕志の引退試合を観戦をし、余韻冷めやらない中で、答えが出せない「仕事」の深さを反すうできた1日であった。